

創世記3章1-7節 「人を惑わす者」

1A 狡猾な蛇 1a

1B 海の巨獣

2B 墮落した御使い

3B 高ぶりと妬み

4B 輝きにある偽り

5B 人の裸への攻撃

2A 神への疑い 1b-5

1B みことばに対して 1b-3

1C いのちのことば 1b

2C 独自で答えた女 2-3

2B 神の気前良さに対して 4-5

1C 狡猾な嘘 4

2C 自己投影する蛇 5

3A 惑わしと罪 6-7

1B 賢くする木 6a

2B 罪の始まり 6b

1C 惑わされた女

2C 罪を犯した人

3B 恥が入った二人 7

1C 隠しどころ

2C 自分で隠す試み

本文

創世記3章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、先週、2章まで来ました。3章は、とても内容が濃いので、午前礼拝と午後礼拝で二つに分けたいと思います。今朝は、1節から7節まで一節ずつじっくりと学び、午後には、8節以降最後までを一節ずつ見ていきたいと思います。まず、1節から7節まで一気に読みます。(読む)

主が、ご自分のかたちに造られて、それから男と女に造ることによって、ご自分が一つであることを表しました。神は、ご自分のことを「われわれ」と言われますが、それは、父、子、聖霊がそれぞれ神であるのに関わらず、交わりにおいて一体になっているからです。それで、男だけでなく、女を男から造り、二人が一体となることで、「交わりにおいて一つ」ということをよく示しています。

そして2章25節には、「人とその妻はふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。」とありますね。これは性的な意味での羞恥心の話だけをしているのではありません。いろいろな意味で、隠し立てするものが何一つないからです。神の前でもないし、神にあって互いにもありません。けれども今、読んだように、善悪の知識の木から実を取って食べたなら、裸であることに気づいて、隠しました。3章を読み進めれば、神が来られた時も隠れていますから、確実に恥が中に入ったのです。すべてが、神にあって一つであり、平和と調和があったところから、蛇がだまして、ばらばらになったのです。

そして、ばらばらになると死をもたらす、ということも学びましたね。いのちというのは、いのちの源である神に結ばれているから、いのちが流れます。ところが、切り離されて死んでしまうのです。

「指輪物語」というファンタジー小説がありますが、映画化されて、シリーズになりました。初めのが、そのまま「ロード・オブ・ザ・リング」となっていますが、英語のオリジナルにある副題がありませんでした。それは Fellowship of the Ring です。訳すと、「指輪の交わり」です。指輪は、元々、サウルン、すなわちサタンの所有物。その指輪を巡って、仲間がどんどんばらばらになっていきます。その指輪こそ、罪を表しています。罪が、神と人との関係をばらばらにし、人と人との関係、その一体性もばらばらにします。

1A 狡猾な蛇 1a

^{1a}さて蛇は、神である主が造られた野の生き物のうちで、ほかのどれよりも賢かった。

1B 海の巨獣

「蛇」が登場しますね。聖書では、初めての登場のように思うかもしれませんが、実は「海の巨獣」という言葉が、1章21節に出ていました。「神は、海の巨獣と、水に群がりうごめくすべての生き物を種類ごとに、また翼のあるすべての鳥を種類ごとに創造された。神はそれを良しと見られた。」海にいれば巨獣で、竜としても聖書に出てきますが、それは同時に蛇でもあり、陸にいれば蛇です。古代の文献では、竜が海の中において、蛇のような形をしているのを見ます。イザヤの預言を見てください、「27:1 その日、【主】は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタンを、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。」竜、蛇、レビヤタンが一つの生き物として出てきます。

この海にいる巨獣ですが、闇が「大水の面の上にある」と1章2節にありましたね。荒れ狂う海を考えていただければよいのですが、そういったものは制御できないところ、闇の世界とみなされています。そこにいる生き物の長というようなイメージが、この動物には付きまといまいます。

しかし、蛇や竜そのものが、悪いということではないのです。背後に、霊の存在があります。闇の勢力がいて、その勢力が蛇の中に入り、それで女、エバに語りかけていくのです。それが分か

るのは、黙示録 12 章です。「12:9 こうして、その大きな竜、すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者、全世界を惑わす者が地に投げ落とされた。また、彼の使いたちも彼とともに投げ落とされた。」サタンが、背後にいるということです。

2B 墮落した御使い

サタンというのは、元々、「敵対者」という意味のヘブル語で名前ではありません。彼の姿が、エゼキエル 28 章に出て来て、彼はエデンの園で、ケルブ、すなわち御使いケルビムの一人でした。

¹²「人の子よ。ツロの王について哀歌を唱えて、彼に言え。神である主はこう言われる。あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。¹³ あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石に取り囲まれていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、縞めのう、碧玉、サファイア、トルコ石、エメラルド。あなたのタンバリンと笛は金で作られ、これらはあなたが創造された日に整えられた。¹⁴ わたしは、油注がれた守護者ケルビムとしてあなたを任命した。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いていた。

¹⁵ あなたの行いは、あなたが創造された日から、あなたに不正が見出されるまでは、完全だった。¹⁶ あなたの商いが繁盛すると、あなたのうちに暴虐が満ち、こうしてあなたは罪ある者となった。そこで、わたしはあなたを汚れたものとして神の山から追い出した。守護者ケルビムよ。わたしは火の石の間からあなたを消え失せさせた。¹⁷ あなたの心は自分の美しさに高ぶり、まばゆい輝きのために自分の知恵を腐らせた。そこで、わたしはあなたを地に放り出し、王たちの前で見せ物とした。

ツロの王に対して、主が語られていますが、それはツロには人の王がいて、その背後で働いている悪魔について話しているのです。ところで、「悪魔」というのも名前ではなく、ギリシア語で「中傷者」という意味です。この霊的勢力は、名前がなく、ただいろいろな呼び名があるだけです。いずれにしても、彼はケルブでした。これだけ美の極みだったのに、それが主の御座のそばにいたからだったのに、その美に溺れて、墮落したのです。

3B 高ぶりと妬み

どのように高ぶったのか？イザヤの預言には、バビロンの王に対する預言があります。そこも同じく、バビロンの王の背後にいる存在を、「明けの明星」で登場します。14 章です。

¹² 明けの明星、暁の子よ。どうしておまえは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしておまえは地に切り倒されたのか。¹³ おまえは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。¹⁴ 密雲の頂に上り、いと高さ方のようになろう。』¹⁵ だが、おまえはよみに落とされ、穴の底に落とされる。

いと高き方のようになる、と言って、高ぶりましょう。そう、彼は神のそばに仕える御使いでしたが、彼は不満足に思い、神に対して妬み、自分自身が神のようになろうとして高ぶったのです。それゆえに、彼は自分に任された領域から追い出されました。墮落しました。

聖書の話は、これが大本になっています。つまり、墮落した御使いサタン、悪魔が、自分の犯した罪の中に、また自分が墮ちたところに、神の最高傑作である人を引きずり降ろそうとする試みなのです。そして、人はだまされて、墮落してしまうのですが、神が人を、サタンの縄目から奪還して、サタンの脳天を砕くという内容になっています。

4B 輝きにある偽り

そして、「蛇」のヘブル語は、「ナハシュ」と言います。そして青銅を意味するヘブル語が、「ネホシユト」です。同じような発音で、同じ語源から来ています。つまり、蛇というのには、青銅にあるような輝きのイメージがあるということです。青銅というと輝きというのは連想できないかもしれませんが、当時は鏡に使われていた材料です。聖書には、「サタンでさえ光の御使いに変装します。」とあります(Ⅱコリ 11:14)。サタンが、真っ黒で、槍をもっているような存在を思い浮かべるかもしれませんが、闇の勢力者は実は光に変装しながら、私たちの前にやって来るのです。むしろ、輝いているもの、良いように見えるものに惑わしがあります。

5B 人の裸への攻撃

さらに、「賢かった」という言葉がありますね。これは、ヘブル語の「裸」に似た言葉になっています。蛇は、賢く、いかに人を神から引き離すかを考えて、彼らが一体となっていて、しかも裸でいるところを付け狙うのです。狡猾です。

人というのは、神に安全に守られています。そして神がその平和を維持されるために、秩序を定めておられます。その原型が、男であり女です。神が人を造り、人から女を造られました。秩序においては、後から来た女に対して、猛攻撃をかけるわけです。そして、知らない、という部分において、攻撃をしかけます。

イスラエルの荒野の旅で、アマレク人が攻めてきた時のことを思い出してください。「申 25:18 彼らは神を恐れることなく、あなたが疲れて弱っているときに、道であなたに会い、あなたのうしろの落伍者をすべて切り倒したのである。」後ろの落伍者を切り倒していますね、卑劣です。おそらく高齢者や女子供たちが多かったことでしょう。弱い部分に攻撃をします。

2A 神への疑い 1b-5

^{1b} 蛇は女に言った。「園の木のどれからも食べてはならないと、神は本当に言われたのですか。」

1B みことばに対して 1b-3

1C いのちのことば 1b

蛇の初めの攻撃は、神の言われたことに疑いをかけることです。これまで主なる神は、ご自分のことばによって、天と地を造られました。同じ息によって、人を生きるものとされました。このことばにこそ、いのちがあり権威があります。私たちは、その聞いたことを生きた神のことばとして素直に受け入れる時に、それが自分を生かし、いのちとなり、神に栄光をお帰しすることができます。ですから、蛇は、主が語られたことばに疑いをかけるという手法を取りました。はたして、その言った通りなのか？と疑いをかけます。

しかも、蛇は、神の言われたことを歪めています。「園の木のどれからも食べてはならない」なんて言っていません。すべての木から取って食べていいのですが、園の中央の善悪の知識の木から取って食べてはいけけないのです。ところで、人を貶めるために行う手法として、極端なことを言って、その人の頭を真っ白にさせて、それで、相手がどう応答すればよいか分からなくさせるという方法です。冷静に考えることができないようにさせます。中傷をする人は、人の言っていることを拡大解釈して、あたかもそれを言ったかのように煽ります。その背後には悪魔がいます。

2C 独自で答えた女 2-3

²女は蛇に言った。「私たちは園の木の実を食べてもよいのです。³しかし、園の中央にある木の実については、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけけないからだ』と神は仰せられました。」

ここでエバが、アダムから聞いたことに基づいて話しているのを思い出してください。主から直接聞いているのはアダムだけです。「2:16-17 神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。17 しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」

エバは二つの点で、ずれてしまっています。一つは、園の中央にあるいのちの木からは、実を取って食べてよいのです。もう一つは、触れてもいけないとは、主は言われませんでした。これが、エバがアダムの言ったことを、思いの中で間違っして聞いてしまっているのか、それともアダムが、余計に付け足して、不正確に彼女に語ったのか分かりません。後者であれば、「善悪の知識の木に近づかせないため、いのちの木のこととは言わないでおこう。また、触ることもいけないようにすれば、食べることはしない。」としたのかもしれませんが。

エバは、対峙するとか、戦うということを知りませんでした。今、自分が攻撃を受けているということさえ、分からなかったでしょう。何でも聞くことというのが、良いことではありません。主の語られることを聞き、主に従うのです。そして夫を主が立てておられ、夫が主から聞いたのですから、夫に

聞くべきです。そして、「あなたは嘘をついている。」として、蛇に対峙して、退けるべきです。しかしすでに、蛇が、主の言われていることに疑いをかけ、また、主の言われていることを歪めて引用していますから、その土台が心の中で崩されています。非常に巧妙です。

2B 神の気前良さに対して 4-5

1C 狡猾な嘘 4

⁴すると、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。

主が必ず死ぬと言われましたが、蛇は、決して死にませんと言います。真っ向から偽っています。主が悪魔のことを、「偽りの父」と呼ばれました(ヨハネ 8:44)が、果たしてその通りです。

2C 自己投影する蛇 5

⁵それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」

ここでは、神ご自身が、自分のようになられては困るとして、神が善悪の知識を分かち合わないようにしているのだ、専売特許にしているのだということを、蛇はささやきます。つまり、神のことばに対して攻撃をした次は、神の気前良さや公平性について、疑いをかけさせています。

神は、「良かった」と、天地を造られた時に言われました。そして、神のかたちに人を造り、また女を造られました。そして、園に生えている木々から、実を取って食べてよいのです。ここまで、主は良くしてくださっているのですが、蛇はエバに対して、不満足にさせています。そして、主ご自身が不公平な方、意地悪な方であるかのように見せているのです。

何をもって、私たちは主なる神から離れてしまうのか？それは、主の良さ、気前の良さ、慈しみや恵みを知らず、また信頼していないからです。タラントの譬えで、一タラントを受け取ったしもべの言葉を思い出してください。彼が、なぜ主人からの金を地面に隠していたのか？「マタ 25:24 ご主人様。あなた様は蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかつたところからかき集める、厳しい方だと分かっていました。」ない所から取ろうとする、搾り取る者だと思っていたのです。

3A 惑わしと罪 6-7

1B 賢くする木 6a

^{6a}そこで、女が見ると、その木は食べるのに良さそうで、目に慕わしく、またその木は賢くしてくれそうで好ましかった。

エデンの園において、木々は、「2:9 見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木」とあります。

けれども、今、蛇にそそのかされた時は、意味が変わりました。それは、不満足になり、それを満たそうとして貪っているための欲望です。ヨハネの第一の手紙に、世を愛することについて、こう書いてありました。「2:16 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。」

「食べるのに良さそう」というのは、肉の欲です。「目に慕わしく」というのは、目の欲です。そして、「その木は賢くしてくれそう」というのが、暮らし向きの自慢です。この言葉は、もっと生活全般においての高ぶりであります。

こうやって、世の愛の三つの要素をすべて満たす欲に、エバが引き寄せられています。特に、自分が賢くなるという欲望が、蛇がエバに仕かけたものとして突出しています。神なしで、自分自身でやっていけるではないか。自分が神のようになれば、大丈夫だというものです。この、「私は大丈夫」「私は結構です」というものが、まさにいのちをなくし、死に至らせる、神に対する高ぶりです。

2B 罪の始まり 6b

^{6b} それで、女はその実を取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、夫も食べた。

1C 惑わされた女

聖書では、罪を犯したのがエバだ、という言葉は出てきません。彼女については、だまされたことが書かれています。「1テモ 2:14 そして、アダムはだまされませんでした、女はだまされて過ちを犯したのです。」

2C 罪を犯した人

しかし、アダムが罪を犯したと出てきます。そうです、彼は、主から直接、「2:17 善悪の知識の木からは、食べてはならない。」と言われていたのです。エバが惑わされたのに対して、アダムは、主が言われたことに従わなかった、ということで、道を外したのです。これが、罪の始まりです。「ロマ 5:12 こういうわけで、ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がったのと同様に——」初めの人を犯したので、それですべての人と同じように罪があり、そして死も広がりました。

アダムは、言ってきたのが、たとえ妻であっても、主の言われることによって自分は生き、そして、主の言われることによって、妻をも治めて、それで妻が主に従うようにさせていかなければいけません。自分から女が造られ、彼女は自分にとっての助け手なのですから。主が言われることが第一です。そうして神により頼み、神に従い、その関りに、神のいのちが流れ、私は生きています。それで、妻が言っていることを初めて聞くことができます。主にあって、聞くのです。

3B 恥が入った二人 7

1C 隠しどころ

^{7a} こうして、ふたりの目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。

これは、神から離れた瞬間であり、霊的に死にました。主からのいのちが途絶えました。その代わりに、目が開かれて、裸であることを知るのです。自分の性器の部分の隠さなければいけなくなりました。性の営みによって、「生めよ、増えよ」という主の命令と祝福があるのに、その部分に恥ずかしい思いが出てきたのです。

これが、罪、そしてその後に来る恥の問題です。「ヘブル 4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」主の前に、また主にあって互いに、公正明大にならなくなったのです。隠さなければいけなくなりました。

2C 自分で隠す試み

^{7b} そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。

いちじくの木は、中東の地域では最も大きな葉なのだそうです。ですから、彼らは、自分の恥について精一杯の努力をしました。しかし、8 節以降で見る限り、彼らの恥ずかしさはなくなっていないませんでした。これが、人間のありのままの姿です。自分には罪があり、恥があるのですが、自分自身でそれを覆おうとします。自分の努力で補おうとするのです。けれども、罪や恥の思いは取り除かれることはありません。

8 節以降で、罪を犯した後になんてなるのかを見ていきますが、希望もお話したいと思います。アダムは罪を犯す人々のかしらになりました。しかし、キリストは義と認められる人々のかしらとなります。「Ⅰコリ 15:22 アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストにあってすべての人が生かされるのです。」私たちの主キリストは、エバの受けた惑わし、そしてアダムによる罪と恥について、そのすべてを受けて、私たちを神のかたちに取りもどされました。

エバの受けた誘惑について、主ご自身が荒野で悪魔から誘惑を受けられました。

³ すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じなさい。」⁴ イエスは答えられた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる』と書いてある。」これは、「肉の欲」に対して打ち勝っておられます。

⁵ すると悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、⁶ こう言った。「あな

たが神の子なら、下に身を投げなさい。『神はあなたのために御使いたちに命じられる。彼らはその両手にあなたをのせ、あなたの足が石に打ち当たらないようにする』と書いてあるから。』⁷ イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある。」これは、「目の欲」に対して打ち勝っておられます。

⁸ 悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、⁹ こう言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」¹⁰ そこでイエスは言われた。「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある。」これは、「暮らし向きの自慢」に打ち勝っておられるのです。高ぶりに勝利しておられます。

このようにして、主は、罪は持つておられませんでした。罪の中にいる私たちと同じようになり、試みを受け、その上で勝利しておられるのです。この方にあずかれば、私たちも恵みによって、誘惑に打ち勝ちます。

そして、アダムによる罪と恥については、十字架を思い出してください。十字架は、まさに罪人の受ける極刑です。主キリストが、「神の子なら、キリストならそこから降りてこい」と罵られても、降りて来られなかったのは、私たちが罪人なのに、その罪を身代わりに受けて、それで私たちが無罪放免となり、罪から解放されるためなのです。

そして恥についても、主は忍ばれました。十字架は、罪に対する罰ですが、その手法は、辱めであります。人前で裸にされて、鞭うたれます。そして全裸になります。それは通りで行われますが、公衆の目にさらされます。そして、酸いぶどう酒を飲ませるために、海面を棒につけて伸ばしました。当時、ローマの公衆トイレで、おしりふきに使っていたのは、まさにこれと同じです。辱めを受けられました。それらは、私たちの恥の身代わりになったのです。

このようにして、主は私たちと同じようになり、同じようになられることによってそこから救い出すという働きを行われました。このことを信じて、受け入れる時に、あなたも罪の赦しと、罪からの解放を得ることができます。